

書物で繙く登山の歴史

1

ヨーロッパ近代登山と日本

信州大学附属図書館 山の日記念特別展 2017

開催日 * 2017年 8月17日(木) - 10月3日(火)

開館時間は中央図書館 Webサイトでご確認ください。

特別展示日 * 9月26日(火) - 10月3日(火) [土・日を除く 10:00 - 17:00]

会場 * 信州大学中央図書館 1階 展示コーナー

このたび、信州大学附属図書館では、日本有数の山岳資料コレクション「小谷コレクション」から、ヨーロッパ近代登山と日本をテーマとした貴重な書物・図版を展示し、登山の黎明期を振り返ります。特別展示日には、19世紀半ばにロシア王の使節でインド・ヒマラヤ地方の調査を行った、シュレーギントワイト兄弟による「インドおよび高地アジア調査記」から、エヴェレストのパノラマ図等の現物を展示します。また、展示資料を詳しく紹介する「源流・山岳博物館長による展覧会セミナー」、元長野県登山岳救助隊長で「信州山歩き地図」の著者でもある中嶋豊氏の講演会(テーマ: 秋・冬に向けた安全登山)も開催します。この機会にぜひ、信州大学附属図書館に足をお運びください。たくさんの方のご来場をお待ちしております。



関連イベント	
展覧会セミナー 日時 * 9月27日(水) 12:20~12:50 講演者 * 渡邊 匡一先生(信州大学附属図書館長/信州大学学芸員) 会場 * 中央図書館 1階 自由学習スペース	講演会 日時 * 10月3日(火) 18:00~19:30 講演者 * 中嶋 豊氏(長野県登山岳救助隊長/信州大学学芸員) 会場 * 中央図書館 2階 セミナールーム ※講演会終了後、著書の販売・サイン会を開催します

いずれも、入場無料・申込不要

知の森

昼ときせミナ

授業とは一味違う
先生の話が聞ける30分

- * 事前申込不要
- * どなたでも参加できます
- * 昼食持込可

全キャンパスで
TV 配信します!
教育学部、工学部、農学部、
繊維学部の各図書館でご覧
ください。

月1回休みの図書館で、「研究の内容や楽しさについて」「生の学生時代のこと」「学生に伝えたいメッセージ」など先生方にお話しいただきます。よく知っている先生の意外な一面や、普段なかなか接することがない他学部の先生の話聞くチャンスです。

日時: 2017年9月27日(水)
12:20 - 12:50

講師: 渡邊 匡一先生
副学長(附属図書館長)

テーマ: 「書物で繙く登山の歴史①
ヨーロッパ近代登山と日本」

場所: 中央図書館1階
自由学習スペース



第1回は、18世紀、ヨーロッパで産声をあげた近代登山の展開と、19世紀後半、ヨーロッパの登山家たちが富士山や北アルプスなどを登攀する、日本の近代登山の黎明期に焦点を当てます。



小谷コレクション

旧制松本高校出身の実業家、登山家であった小谷隆一(1924－2006)が、山岳図書の蒐集家であった小林義正(1906－1975)から譲り受け、さらに蒐集を続けて完成させた山岳図書コレクション。

2003年、小谷が旧制松本高校の出身であった縁もあり、信州大学へ寄贈されました。

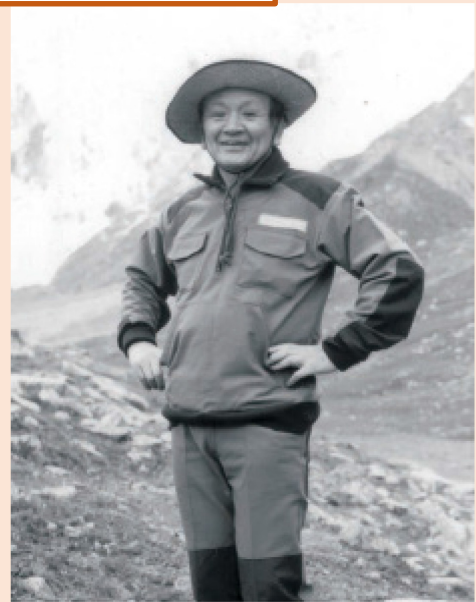
コレクションの内、江戸時代の和古書・古地図については、全文を電子化して公開しています。

近世日本山岳関係データベース(<http://www-moaej.shinshu-u.ac.jp/>)



コンゲールにて
(1980年)

松本高校時代



1. ヨーロッパ近代登山の確立と展開

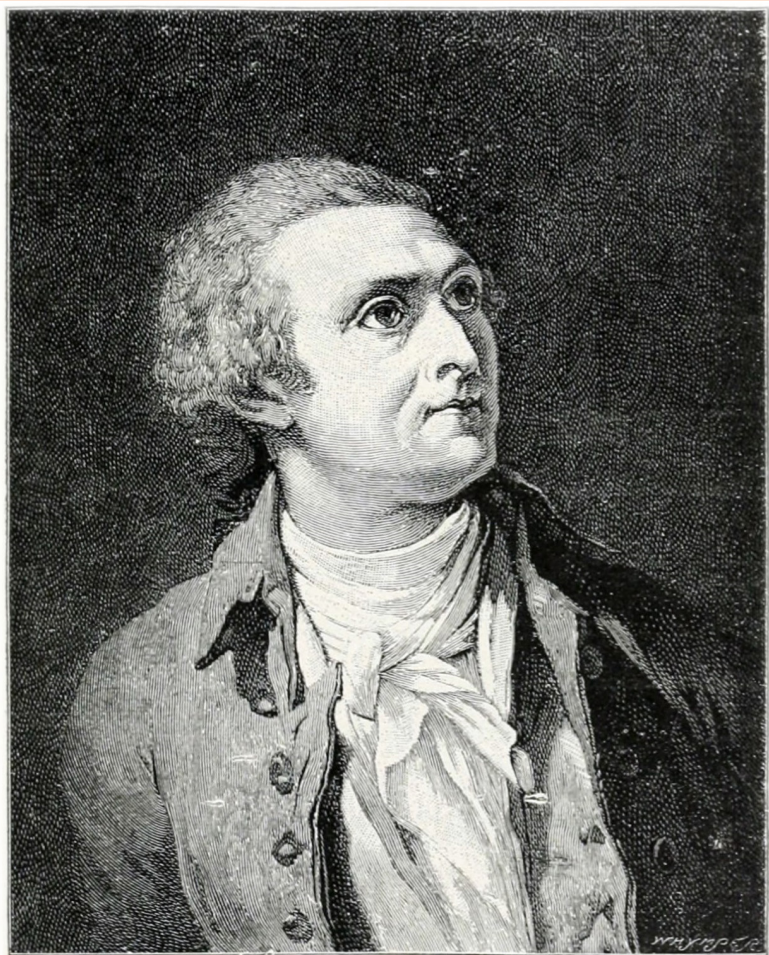
山を悪魔の棲家として忌避していた中世の時代が終わりを告げ、自然科学の発展や、大航海時代が生み出した「未知の世界」へのあくなき探求心が、やがて近代登山というかたちで結実します。



メルカトル地図(1633)

朝鮮 半島が大陸とつながっておらず、島として描かれている。北海道がなく、信濃は「Rinano」と記されている。

1786年、地質学者オラス・ベネディクト・ド・ソシュールの指導によるアルプス最高峰モンブラン(4810m)の初登頂が近代登山の始まりとされることから、わかるとおり、登山家の多くは学者でした。



Saussure, from a picture by St. Ours.

オラス・ベネディクト・ド・ソシュール
(Horace-Bénédict de Saussure 1740-1799)

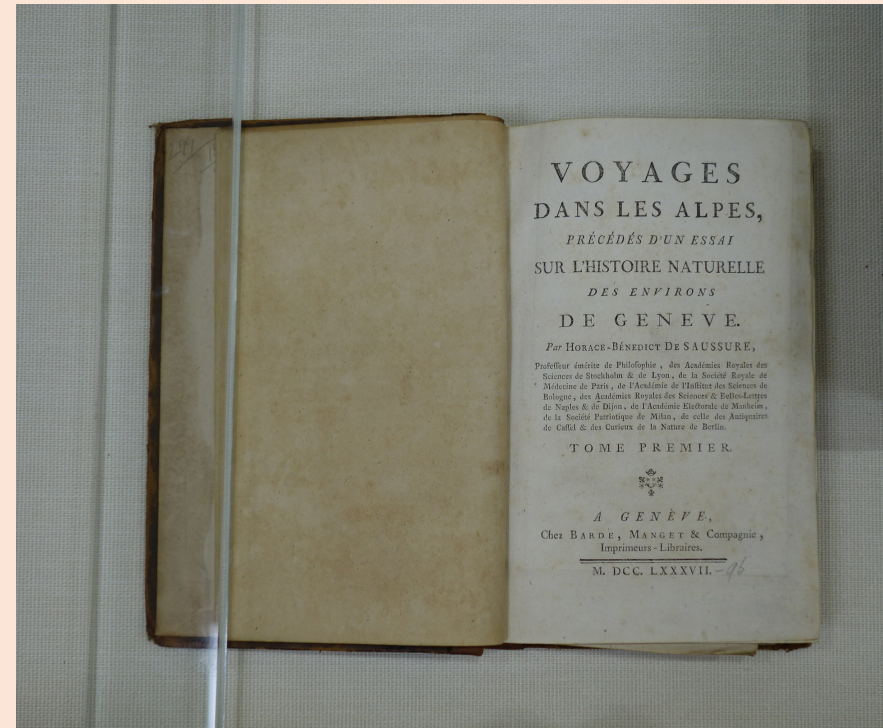
スイス出身。ジュネーブ大学の教授。
研究分野は、地質学、気象学、植物学、
化学、物理学等。
シャモニーやツェルマットを起点に、
アルプス各地で学術的観測を行い、
その成果は『Voyages dans les Alpes』
(『アルプス山脈の旅』)にまとめられた。
言語学者として有名なフェルディナン
ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure)
は曾孫。

Voyages dans les Alpes

by Horace-Bénédict de Saussure
1786-1796

1774年(グラモン)、76年(ビューエ)、
78-80年(グラモン、ヴァルソレ氷河、
ロシュ・ミシュル)、
87年(モンブラン)、
88年(コル・デュ・ジュアン峠)、
89年(ビッツォ・ビアンコ、ツェルマット)、
92年(マッターホルン、テオドウルホル
ン)

計7回の旅と学術的観測について記
された、ソシユールの研究の集大成と
も言うべき書である。





ジェームス・デビッド・フォース
(James David Forbes 1809-1868)

スコットランド出身。エジンバラ大学教授、セントアンドルース大学教授学長を歴任する。

研究分野は、物理学、地質学(氷河学)。地震計の発明者としても知られる。フォースは教鞭をとるかたわら、アルプスの初登頂を成功させるなど、科学的登山の祖といわれる。

**Travels through the Alps of Savoy
and other parts of the pennine
Chain : with observations on the
phenomena of Glaciers**

by James D. Forbes 1843

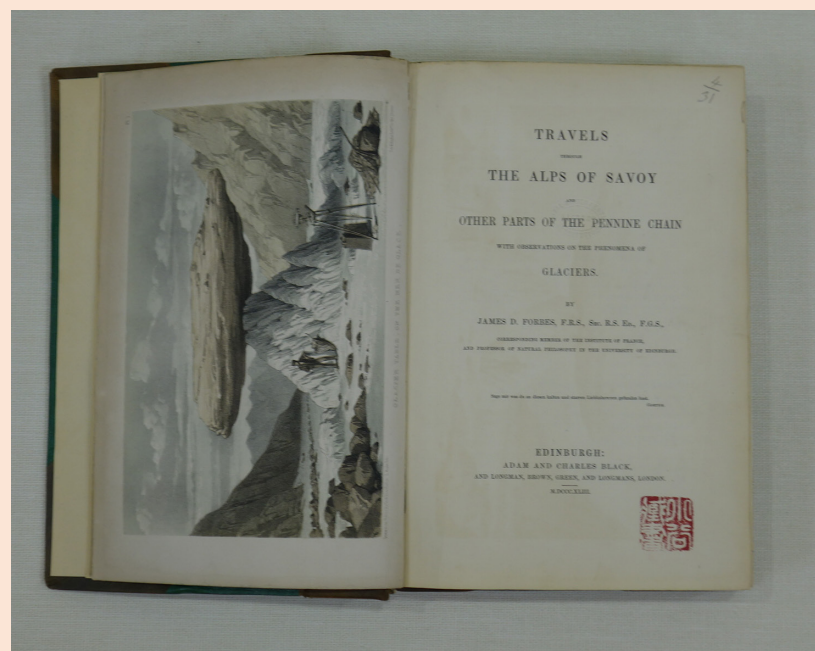
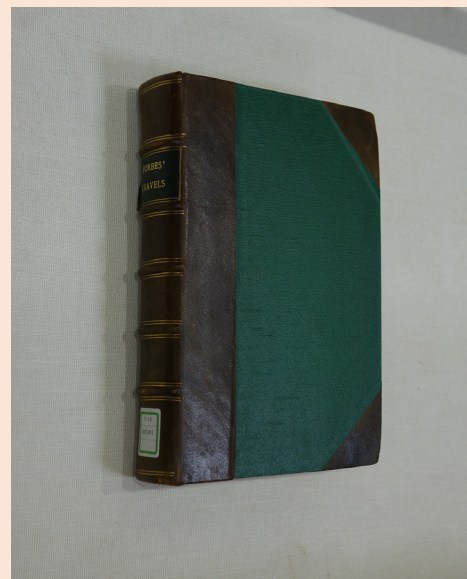
フォーブス(1807ー1868)が、サヴォイ地方のアルプス(シャモニ付近)を旅行した際の旅行記で、本書はその初版。

氷河の現象を科学的に分析・著述した最初の書物として名高い。

氷河の研究としては、他にも『Occasional Papers on the Theory of Glaciers』(1859)、

『A Tour of Mont Blanc and Monte Rosa』(1855)

などの著作も残している。

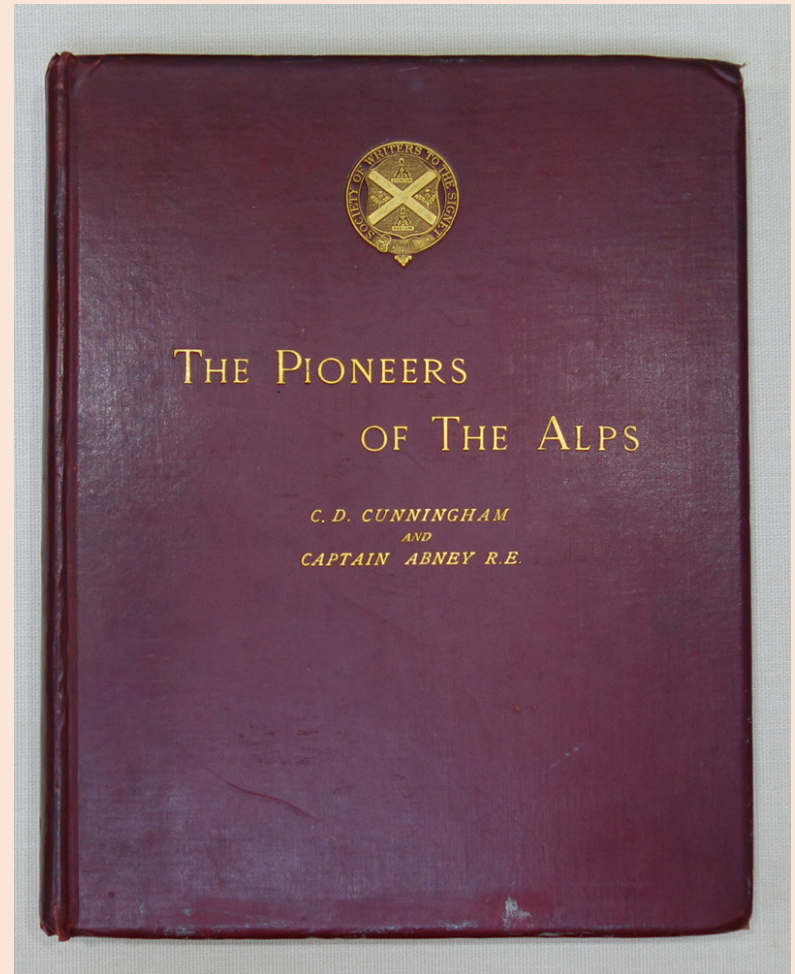


The pioneers of the Alps
by C.D. Cunningham and W. de
W. Abney 1887

近代スポーツ登山の歴史をひもといた書。

14世紀のピラトス登山から稿を起し、
遭難事故一覧表、冬期登山やザイル・アイスアックス技術についての解説、約40人のガイドの紹介、ならびに追悼文などを記す。

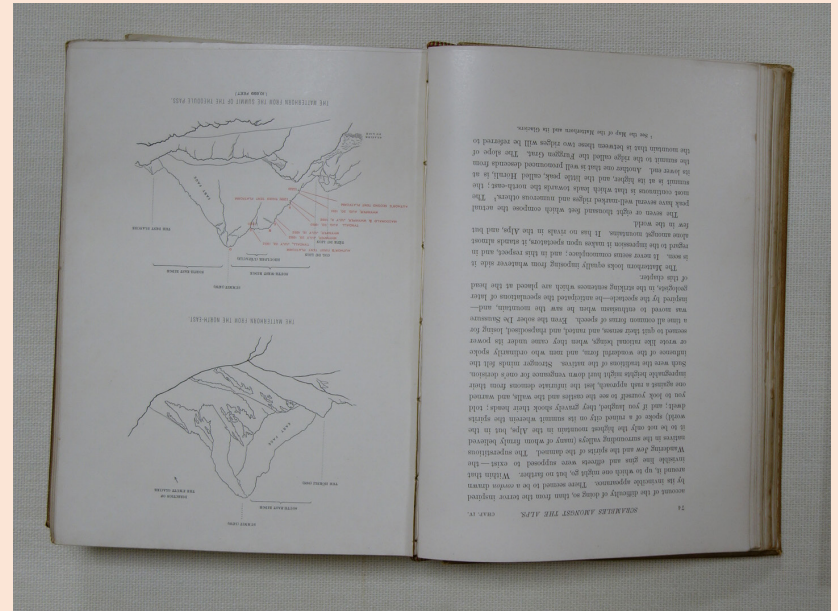
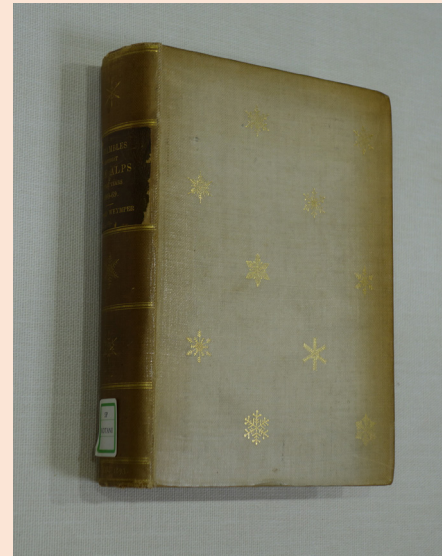
著者はイギリスの登山史家であるC. D. カニンガム(1856ー1896)とW.de W. アブニイ。



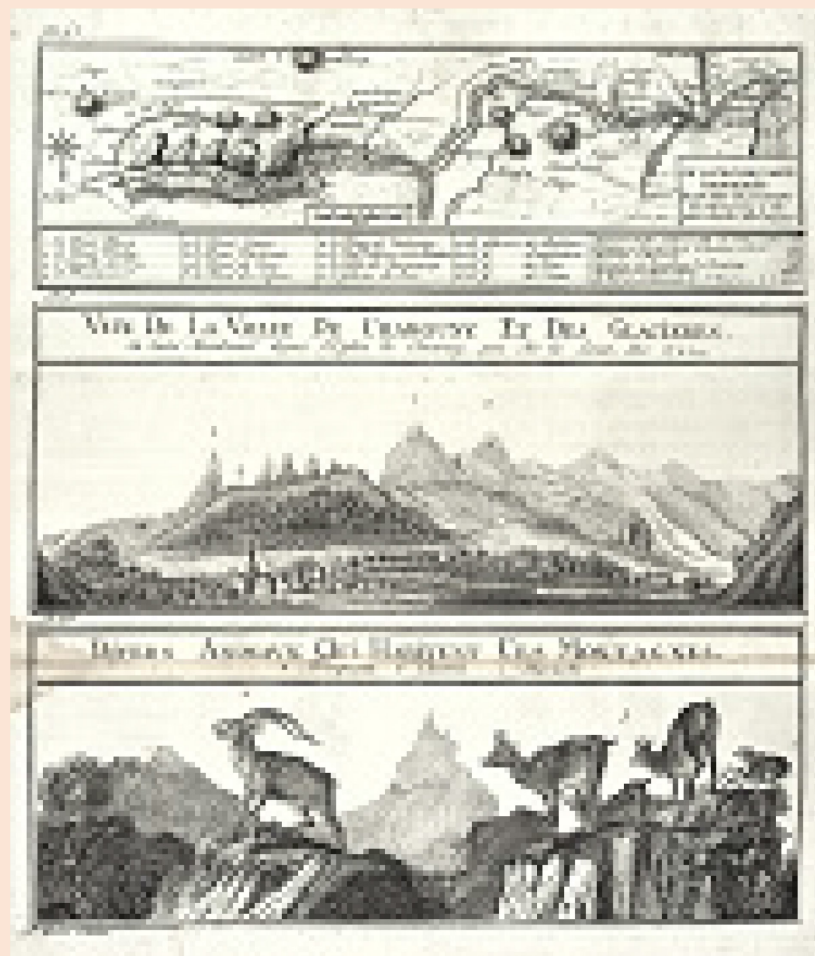
Scrambles amongst the Alps by Edward Whymper ; revised and edited by H. E. G. Tyndale 1936

マッターホルン初登頂者として著名な
登山家、エドワード・ウィンパー(1840
ー1911)が、マッターホルン初登頂
(1865年7月)と、その後に起こった
悲惨な遭難事故について記した山岳
文学の名著。

日本でも、浦松佐美太郎氏の翻訳で
『アルプス登攀記』として出版され、早
くから愛読されている。



1867年、アルプス最後の未踏峰であったマッターホルン(4477m)が、エドワード・ウィンパーによって登頂されると、やがて登山家(学者)達の目は、未開の地ヒマラヤ、そして日本へと向けられていきます。



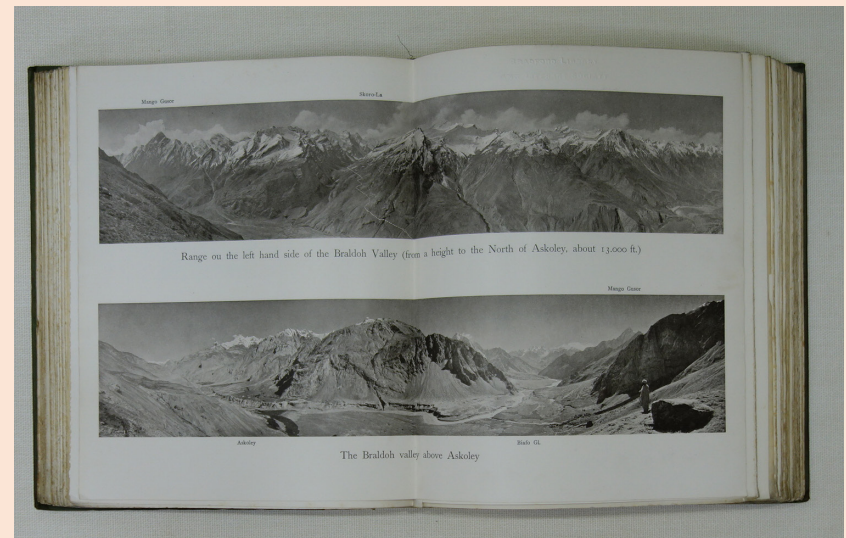
An account of the glaciers or ice Alps in Savoy : In two letters, one from an English gentleman to his friend at Geneva; the other from Peter Martel, engineer, to the said English gentleman by Peter Martel 1744

モンブランが登場する、もっとも早い文献。
著者マルテルについては未詳

**Karakoram and western
Himalaya 1909 : an account of
the expedition of H. R. H. Prince
Luigi Amedeo of Savoy, Duke of
the Abruzzi**

**by Filippo de Filippi ; with a
preface by The Duke of the
Abruzzi 1912**

イタリアの学者で探検家でもあるフィリッピ・フィリッポ(1869ー1938)が、1902年に参加したK2遠征の報告書。大部の書物であるが、別冊として巨大なバルト口氷河と長く連なるK2を主峰とした雄大な峰々のパノラマ写真が添えられている。



The valley of flowers by F.S.Smythe 1938

英国の著名な登山家である、F.S. スミス(1900ー1949)が、250部限定の著者書名入りで出版した書。

「丘と丘陵に咲く花を愛する人に」と扉に印刷されているように、ヒマラヤの岩のあい間に、あるいはせまい緑の地帯に咲く可憐な草花についての本である。

美しい写真16枚が添えられている。今回は、写真16枚全てを展示しています。



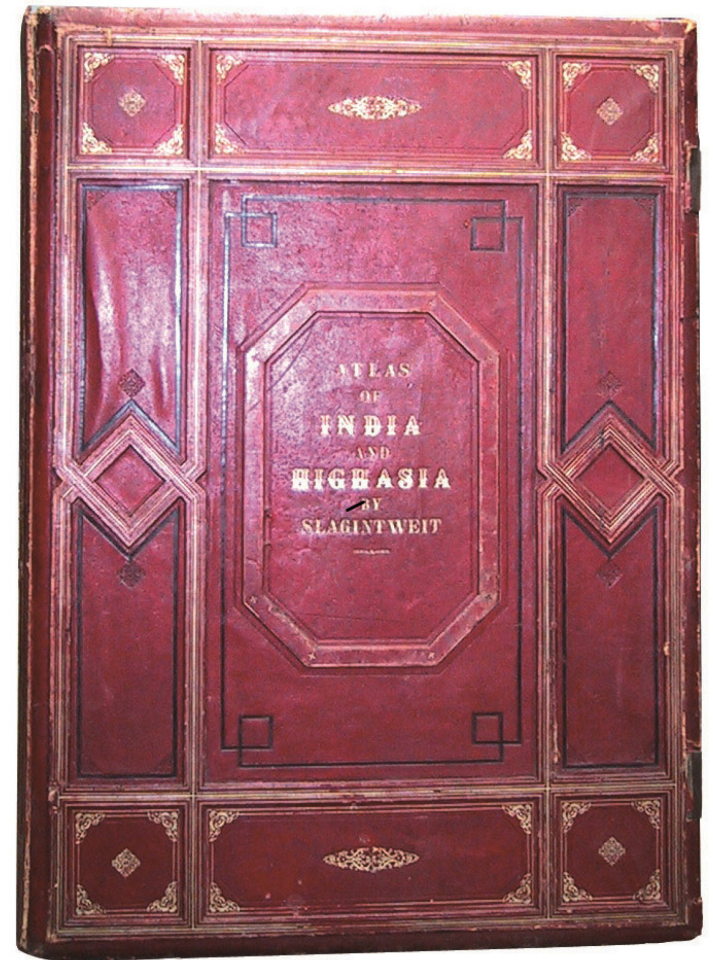
Atlas of India and High Asia
(Results of a scientific mission to
India and high Asia)
1861-1866

シュラーギントワイト3兄弟がプロシア王の後援を得て、1854年から58年にかけておこなった、インド・ヒマラヤ地方の調査記録報告書(4冊)と図版(60枚)は、大型本の型をした箱に納められ、献呈された。

展示品は、図版の内、エヴェレストと、インド地方の気候図である。

本型の箱は、特別展示日に展示の予定。

特別展示日： 9月26日(火)ー10月3日(火)[土・日を除く10:00 -17:00]



Atlas of India and High Asia

(Results of a scientific mission to India and high Asia) 1861-1866

パノラマ図「アトラスNo.1エヴェレストー旧名ガリサンカアル」。1855年6月、ヘルマン・シュラーギントワイトにより描かれた。下方にまだ、測量されていない地球上最高の山と付記されている。



2. 日本を訪れた登山家たち

19世紀後半、極東の未知の国「日本」へと多くの西洋人(特にイギリス人)が訪れ、高山を次々と踏破していきます。

1860年 ラザフォード・オルコック(イギリス駐日公使) : 富士山

1873-77年 ウィリアム・ガウランド(冶金技師、大阪造幣寮技師)
御嶽山、立山、槍ヶ岳

1878年-81年 アーネスト・サトウ(イギリス公使館通訳・駐日公使)
富士山、針の木峠、間ノ岳など

さらに「日本アルプスの父」ウォルター・ウェストンによって穂高など多くの山々が踏破されていきました。

日本の山々は、彼らの著書や山岳会、学会などでの講演を通して、西洋に広く知られていくことになります。

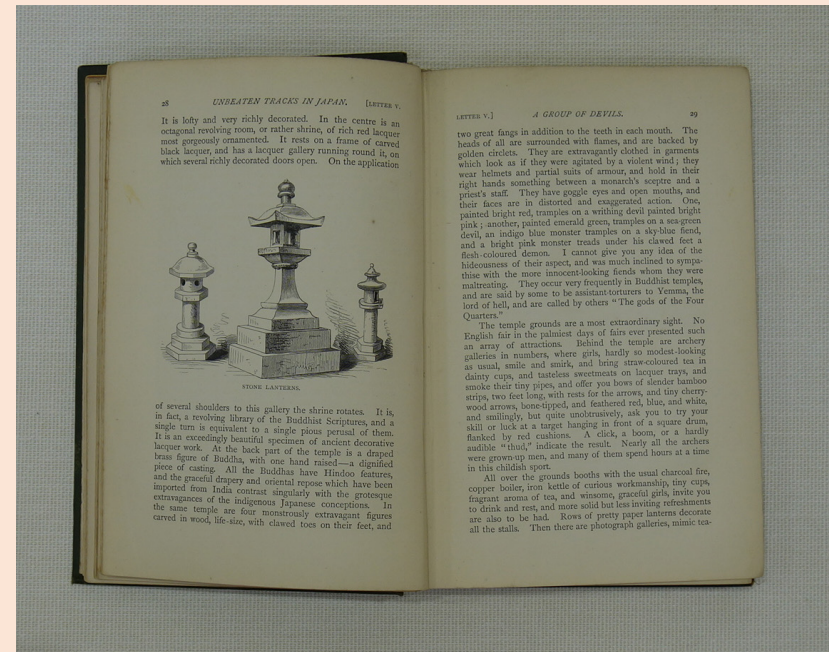
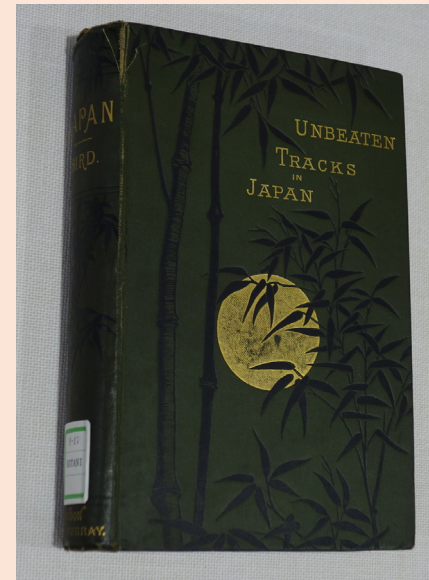
Unbeaten Tracks in Japan by Isabella Bird 1885

1878年の6月から9月にかけて、東京から日光、新潟を経て北海道までの旅行記。

特にアイヌの生活や風俗についての記録は、明治初期のアイヌ文化の状況を知る上で貴重である。

著者はイギリスの旅行家、紀行作家、写真家であったイザベラ・バード。

離日後、数度に渡って朝鮮を訪れ、『Korea and Her Neighbours』を著している。



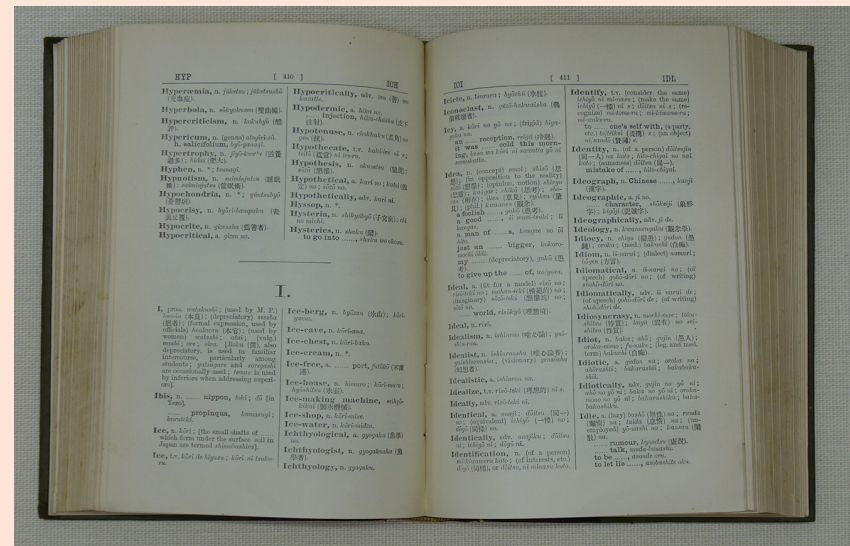


F アーネスト・メイソン・サトウ
(Eanst Mason Satow 1843-1900)

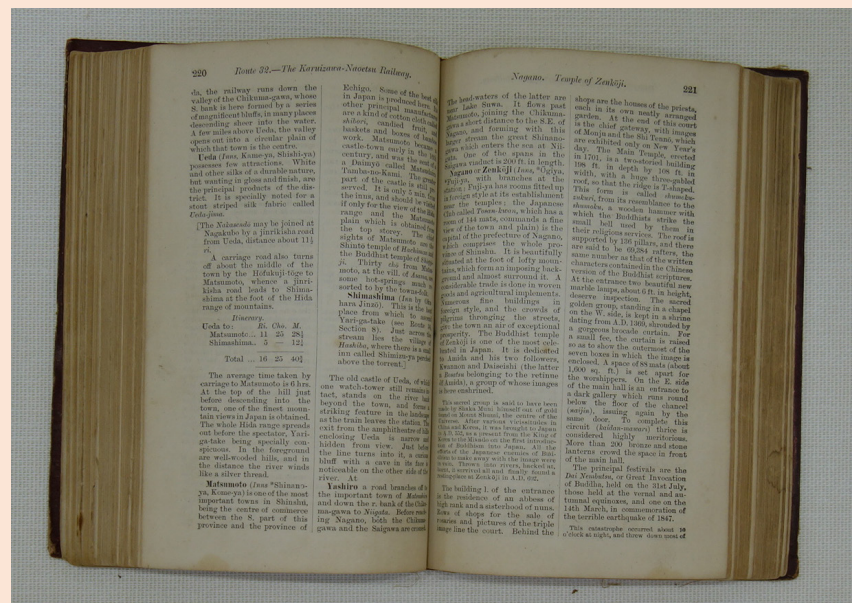
イギリス出身。1862年、イギリス駐日公使館の通訳生として着任し、書記官、駐日公使を歴任、薩摩藩や長州藩、幕府や新政府との交渉に尽力した。また、政務に関わる一方で、日本の歴史や文化、思想等に関心を持ち、『A handbook for travellers in cntral & northern Japan』など、多くの著書を執筆して、日本学の基礎を築いた。

An English-Japanese dictionary of the spoken language .3rd ed. revised and enlarged by E.M.Hobart-Hampden and Harold G.Pariett 1904

アーネスト・サトウによる英和口語辞
典。初版は1876年、二版は1879年に
出版された。
展示品は、E.M.ホバートとハロルド・G.
パリエットによる改訂3版。
日本語を学ぶ外国人のために、
14,266語(二版)の英単語をあげ、
訳語とすべき日本語を記す。
適当な訳語がない場合には、用例を
用いて理解できるように配慮されてい
る。



**A handbook for travelers in
Japan. 3rd ed.,
revised and for the most part re-
written by Basil Hall
Chamberlain and W.B. Mason
1891**



**サトウによるガイドブック『A handbook
for travelers in Central & Northern
Japan』(1881)は高い評価を受け、
2版以降は、旅行案内書の大手、
イギリスのマレー社から出版された。
展示品は3版にあたり、タイトルを変
更し、主編集者も、サトウとともに日
本研究の第一人者であった、バジ
ル・ホール・チェンバレン(1850-1935)
に引き継がれている。**



ウォルター・ウエストン
(Walter Weston 1861-1940)

イギリス出身。宣教師、地理学者。
チェンバレン著『Things Japanese』
(1890)に影響を受け、1888年以降3度
来日し、数々の山に登った他、日本山
岳会の設立にも尽力した。
写真は、日本に近代登山、「楽しみと
しての登山」を浸透させた功績を讃え、
1937年に上高地梓川のほとりに掲げ
られた、ウエストンのレリーフ。

Mountaineering And Exploration In The Japanese Alps

by Walter Weston 1896

浅間山・富士山・北アルプスの紀行文を収めた、日本近代登山史における歴史的書物。

前穂高岳登山の際の上條嘉門次との出会いの一節は、あまりにも有名。日本近代登山の先駆者たちも、この書を読んで、近代登山に目覚めたという。

本書には、アーネスト・サトウ(イギリス駐日公使)に対するウェストン直筆の献辞がしたためられている。

